

本学食物栄養学科の教員免許取得者に対する進路指導方法の検討

大西 正光

An examination of career guidance methods against teacher licensees at our college

Masamitsu OHNISHI

1. はじめに

現在、本学食物栄養学科の教職課程が直面している最も大きな課題は、教員免許状を取得しても多くの学生が教職に就けないまま卒業していくということである。

本学の中学校教諭二種免許（家庭）は、昭和38年に栄養士養成を主な目的とした函館短期大学栄養科に改組された際に、学校現場のニーズに応じて開設された。栄養教諭二種免許は、平成17年の学校教育法改正によって栄養教諭が制度化されたのを受け、本学が本来的に養成してきた栄養士の資格を生かし、平成18年3月に養成課程が認可された。以来、食物栄養学科では教職課程の履修によって、中学校教諭二種免許状（家庭）又は栄養教諭二種免許状を、あるいはその両方の免許状を取得することができる。教員免許状を取得する為に2年間努力を重ねる学生には、卒業後一人でも多くの者に教職に就いてほしいが、多くの学生が教職に就けず、他の職に就くことを余儀なくされているのが現実である。

校種を問わず教員採用試験を通過して教職に就くのは大変難しく、本学で取得可能な中学校家庭科と栄養教諭の平成27年度の北海道における採用時の競争倍率は、中学校家庭科で8.8倍、栄養教諭で5.7倍となっている^{1,2)}。今日の少子化現象を考えると、どちらの採用枠も今後減ることはあっても増えることはないだろう。

そこで本研究では、教員免許取得者に対し、現実を踏まえたよりよい進路指導が必要であると考え、過去5年間の教員免許取得希望者の卒業時の就職動向を調べると共に、在学中の教員免許取得を希望する2年次生への質問紙による調査を行った。これらの調査結果を分析し、学生に内在する

進路指導上の課題を発掘し、解決策を検討した。

2. 方法

1) 食物栄養学科教員免許取得者の卒業時における就職先データの集計と分析

本学の実験等倫理委員会の審査を経て、個人情報に十分配慮しながら、就職支援課より提供された食物栄養学科卒業生の過去5年間（平成23年度～平成27年度）における卒業時の就職先データを集計し、教員免許取得者の進路選択と職種について分析した。

2) 質問紙による調査

質問紙による調査を、食物栄養学科在学中の教員免許取得希望2年次生23名に対して、平成28年12月に、研究責任者が調査用紙を配布し、調査終了後に回収して集計および分析を行った。なお、調査結果は当該授業の評価には一切影響しない旨を伝えるとともに、調査用紙の記載事項を全て読みながら進めた。質問紙の内容は、図1に示した。

3. 結果と考察

平成23年度から平成27年度までの本学食物栄養学科5年間における教員免許取得状況を表1に示した。教員免許の取得実人数は、学科の卒業生数が減少傾向にあるにもかかわらず割合として若干ではあるが増加傾向にある。過去5年間の学科卒業生数458名に対して教員免許取得者は全体で83名となっており、その割合は18.1%であった。過去5年間の教員免許取得者83名に対する中学校教諭二種免許（家庭）取得者は30名でその割合は36.1%、栄養教諭二種免許取得者は66名で79.5%であった。中学校教諭二種免許（家庭）と栄養

「教職課程を選択し、そこでの学びについての意識調査」

このアンケート調査は、今後の教職課程の在り方について検討するための資料となるものです。結果の公表に当たっては、個人が特定されたり不利益を被ったりすることはありません。また、得られるデータは研究以外の目的で使用することはありません。自分に当てはまる所の()に○をつけてください。その他であれば文章記述してください。

I 教職課程を選択したのはいつの時点でしたか

1. () 入学前 (1)() ずっと前から先生になりましたので決めていた
(2)() 高校時代に先生に勧められ、教職課程があるので入学した
(3)() 学校説明会・学校見学会に参加して決めた
2. () 入学後 (1)() オリエンテーションで教職課程の説明を聞いて決めた
(2)() 友達と相談して決めた
(3)() 興味があつたので何となく決めた
(4)() 就職に有利な一つの資格と考えて決めた
(5)() その他

II 2年間の教職課程を終えようとしている今考えて

1. 教職課程を選択して

- (1)() 良かった・理由は①() 時間を無駄なく使えた
※複数回答可
- ②() 教養をたくさん身に付けることができた
③() コミュニケーション能力が身に付いた
④() 表現力(書く力・話す力)が身に付いた
⑤() 読んで理解する、聞いて理解する力が付いた
⑥() 実践力が身に付いた
⑦() 教員免許が取れる
⑧() その他

(2)() 何とも言えない

- (3)() 失敗した・理由は①() ただただ苦勞をした

※複数回答可

- ②() 時間の無駄使いだった
③() 自分には合っていないかった
④() その他

2. 卒業後のことについて教えてください

- (1)() 卒業後も何かが教員になるために頑張るつもりでいる
(2)() 迷っている
(3)() 別の道に進もうとしている
- ①() 食に関する仕事に就きたい (就く予定)
②() 教えるという仕事に就きたい (就く予定)
③() 食にも教育にも関係しない仕事に就きたい (就く予定)
④() その他

III 教員採用試験を受験した人にお聞きします

1. 1次試験の受験に関わって教えてください

- (1)() 受験勉強は十分にできた
(2)() 受験勉強は少しかつた
(3)() 受験勉強は全くできなかった
(4)() 受験勉強ができなかった理由について教えてください (複数回答可)
- (1)() 何をどのように勉強すればよいかが分からなかった
(2)() 学校の毎日の学修に追われて勉強する時間が無かった
(3)() どうせだめだと思って、最初から勉強する気にならなかった
(4)() その他

3. 教員採用試験の合格発表が7月の終わりにあって、それから教育実習に入った人に聞

きます

- (1)() 教育実習に向かう気持ちは、採用試験の可否とはほとんど関係無かった
(2)() 教育実習に向かう気持ちは、採用試験の可否に少しだけ左右された
(2)() 教育実習に向かう気持ちは、採用試験の可否に大変左右された

ご協力本当にありがとうございました。

図1 質問用紙

表1 過去5年間の食物栄養学科の教職課程における教員免許取得状況

	23年度卒	24年度卒	25年度卒	26年度卒	27年度卒	合 計
学科卒業者数	98	101	85	89	85	458
教員免許取得実人数	13 (13.3%)	18 (17.8%)	14 (16.4%)	20 (22.5%)	18 (21.2%)	83 (18.1%)
中二種(家庭)	7 (53.8%)	5 (27.8%)	3 (21.4%)	10 (50.0%)	5 (27.8%)	30 (36.1%)
栄養二種	11 (84.6%)	13 (72.2%)	12 (85.7%)	13 (65.0%)	17 (94.4%)	66 (79.5%)
両免許取得者数	5 (38.5%)	0 (0%)	1 (7.1%)	3 (15.0%)	4 (22.2%)	13 (15.7%)
教員就職者数	0	2 (栄養教諭)	1 (栄養教諭)	0	1 (栄養教諭)	4 (4.8%)

※教員免許取得実人数の(%)だけが学科卒業者数に対する割合で、他の(%)は免許取得実人数に対する割合である。

教諭二種免許の両方の免許を取得した学生は13名で15.7%であった。過去5年間の教員としての就職者は栄養教諭としての4名であり、これは学科全体の0.9%、教員免許取得者全体の4.8%であった。以上より、教員免許を取得することはできるが、実際に教職に就くことは極めて厳しく、これが本学食物栄養学科の教職課程が直面している大きな課題である。

次に、過去5年間の食物栄養学科卒業生の卒業時における就職先を図2に示した。卒業時に取得できる栄養士の資格を生かした栄養士・調理師が多く、全体の51.3%と半分以上に達している。このうち教員免許取得者のみの進路状況を表2に示した。教職としては「栄養教諭」としての採用者4名であった。

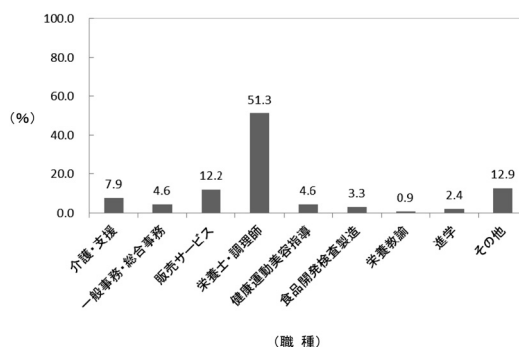


図2 過去5年間の食物栄養学科卒業生の卒業時における就職先

表2 食物栄養学科の教員免許取得者の進路状況

	栄養教諭	栄養士・調理師	サービス・販売	支援・介護	運動指導員	進学	その他	合 計
平成23年度	0	9	1	1	0	0	2	13
平成24年度	2	9	1	4	0	2	0	18
平成25年度	1	4	6	2	0	1	0	14
平成26年度	0	14	1	2	1	1	1	20
平成27年度	1	12	1	0	1	1	2	18
合計(人)	4	48	10	9	2	5	5	83
割合(%)	4.8%	57.0%	12.0%	10.8%	2.4%	6.0%	6.0%	

「栄養士・調理師」としての就職者は48名57.0%と全体の半分以上を占め、教職に就くことのできなかったほとんどの学生が、取得した栄養士の資格を生かして進路選択をしていることがわかる。なお、教職課程の学生の「栄養士・調理師」への就職が57.0%であるのに対し、食物栄養学科全体から教職課程の学生を除いた375名の内「栄養士・調理師」になった学生は187名で、その割合は49.9%となり、教職課程を選択した学生の方が栄養士になる割合は7.1%ほど多いという状況が見られた。教職課程に進んだ場合は必然的に取得単位数が多くなり、他の資格を取る余裕が無くなり、教職をあきらめた場合には自ずと栄養士を選択する傾向が強くなると考える。ただ、その進路の転換において、教職課程で学んだことを踏まえて、栄養士の上位資格であり、栄養指導を行える管理栄養士を視野に入れて栄養士としての進路を選択した可能性も考えられる。

「介護員・支援員」としての就職者が9名出ているが、支援員や介護員は介護等体験などの授業内容とも密接に結びついており、教職課程での学習が直接的に役立つ進路選択の一つといえることができる。

「進学」が5名となっているが、内2名は中学校教諭二種免許（家庭）を取得した学生が教育大学2年次へ編入学し、一種免許取得および教職への確固たる就職を目指したものである。その他、4年生大学3年次への編入学1名、医療系の専門学校への入学1名、調理系の専門学校への入学1名となっているが、これらは2年間の本学での学修の過程で、自分自身の向かうべき方向を見つけて

の進路変更である。

本学の教員免許取得者が、教職以外の職業を選択することを理解し、納得していく過程を探るために、教職課程を目指した時期とその動機について調査し、結果を表3に示した。

平成28年度2年次生への質問紙による調査結果から、教職課程の選択について入学前に決めていた学生と入学後に決めた学生の数はほぼ同じであった。入学前に決めていた学生のほとんどが高校時代の学校説明会や学校見学会での説明を聞いてからというものであり、学校説明会や学校見学会の存在は本学学生が教職課程を選択する場合の重要な情報源、あるいはきっかけとなっているものと推察できる。

入学後のオリエンテーションで初めて教職課程を選択する学生が割合に多いことや自分の考えで主体的に教職課程を選択する学生が少ないこと、また教員免許を技術資格のように考える学生がいることなどが課題として見えてきた。藤原正光ら³⁾によると教育学部への進路決定時期として高校生になってからが7割以上だが、女子では小・中学校という早い時期に決定していると述べている。そのような調査結果から見ると、本学の学生の教職への進路決定時期は少々遅いように思う。早くから教職を意識して学修に取り組む事は、学修時間が限られている短大などでは特に大切であり、例えば本学の場合一般受験、AO受験、推薦受験のどの場合においても面接があることから、教員免許取得を希望する学生を確認した上で、本学と連携しながら高等学校からの教職を意識した進路指導の可能性を考えることができる。

表3 教職課程を選択した時期と動機について

		人数	%
入学前に決めた 9名(45%)	前から先生になりたかった	1	5
	教職課程があるのを知っていた	0	0
	学校説明会・見学会に参加して	7	35
	食育の勉強がしたくて	1	5
入学後に決めた 11名(55%)	オリエンテーションの説明を聞いて	4	20
	友達と相談して	1	5
	興味があり何となく	3	15
	就職に有利な資格	2	10
	親に勧められた	1	5

(回答者20名)

表4 教職課程を選択したことへの現在の意識について

	人数	%
時間を無駄なく使えた	1	5
教養をたくさん身に付けた	12	60
コミュニケーション能力が付いた	15	75
表現力が身に付いた	13	65
良かった 19名(95%)	理解力が身に付いた	7 35
	実践力が身に付いた	13 65
	教員免許が取れる	10 50
	就職の選択の幅が広がった	1 5
	教育実習でいい思い出ができた	1 5
何とも言えない 1名(5%)		
失敗した 0名		

(回答者20名) 複数回答

教職課程を選択したことについて卒業を目前にした12月現在はどうのように感じているか質問し、その結果を表4に示した。

ほぼ全員とも言える95%の学生が、教職課程の選択を「良かった」と感じており、その理由として「コミュニケーション能力が身に付いた」「表現力が身に付いた」「実践力が身に付いた」などにとらえている学生が多いことがわかった。入学時の自分自身と比較してとらえていると考えられるが、こうした評価結果が現れる要因としては、多くの授業が実践的なアクティブラーニングを意識して進められていることに関係があると考えられる。教職課程における模擬授業や学外授業、とりわけ教育実習はこうした力を身に付ける最適な機会と考える。今日コミュニケーション能力や表現力、実践力といった力は、学生の進路選択の幅を大きく

く広げる可能性を持っており、今後も力を入れて取り組まなければならない。

卒業後の進路についてどのように考えているか質問し、その結果を表5に示した。

卒業後も教職を目指して頑張ろうとする学生には教員採用試験に向けた具体的な受験対策指導とその間のフォローが重要な支援となる。迷っている学生には教職への希望をかなえるための道筋や方法を指導すると同時に、伴うリスクについても理解させておくことが大切である。教職以外の別の道に進もうとしている学生が半数おり、多くの学生が栄養士としての資格を生かしたり、教職で学んだことを生かす方向で進路選択をしようとしている。本学において教職課程を選択した学生の約半数が栄養士を目指すという傾向は今後も続くものと考えられる。

表5 卒業後の進路についての質問

	人数	%
卒業後も教員になるために頑張る	2	10
迷っている	9	45
別の道に進む予定	食に関する仕事に就きたい	4 20
9名(45%)	教える仕事に就きたい	2 10
	食にも教育にも関係ない仕事希望	2 10
	その他・進学	1 5

(回答者20名)

進路の切り替えを的確に勧めることは、進路指導において極めて大切なことであるが、一方で、教員免許を持つということは、将来、何時か、どこかで教職を目指すことになる可能性を持つことでもあるということを忘れてはならない。

教員採用試験を受験した学生に対して受験勉強について質問し、その結果を表6に示した。

7割の学生が「受験勉強ができなかった」と答えており、その理由として、試験勉強の仕方に問題がある学生、時間に余裕の無い学生が多いことがわかった。また、最初からあきらめていた学生が半数に上っていた。合格者を出すためには教職に向かう意欲を高め、採用試験に向けた勉強の仕方や時間確保等への細かなアドバイスが必要である。

教員採用試験を受験した学生に対して教育実習へのモチベーションについて質問し、その結果を表7に示した。

函館市の場合、ほとんどの教育実習が8月の始業式からスタートする。それに対して6月下旬に

北海道の教員採用一次試験があり、その合格発表が教育実習直前の7月末にある。

三上ら(2015)は⁴⁾、教職を目指す学生の〈教員を志す気持ち〉が本当にあるか否かという真剣な吟味が教育実習をきっかけに再三行われることを明らかにしている。4年生大学と違い短期大学では、そのような進路選択にとって重要な意味を持つ教育実習の前に教員採用試験の結果が出るという現実がある。不合格者が多い本学の場合、そのモチベーションの維持について大変憂慮していた。ところが、教育実習に向かう気持ちと試験の可否は関係無かったと答えた学生が10名と半分以上を占めた。そこには入学時の教職課程を選択する段階における志望動機の重さが関係したり、教員採用試験と教育実習は別物と考えるような学生の考え方が存在するように思える。しかし、約半数の学生は大なり小なり影響があったと回答していることから、今後採用試験の可否が教育実習に与える影響を極力抑える指導上の工夫が必要と考える。

表6 教員採用試験の受験勉強について

		人数	%
受験勉強は十分できた		0	0
受験勉強は少しできた		5	28
	試験勉強の仕方がわからなかった	6	33
受験勉強は全くできなかった	学校の勉強に追われ時間が無かった	11	61
13名(72%)	最初からあきらめていた	10	56
	その他(記述)受験するか迷っていた	1	6

(回答者18名)

表7 教員採用試験の合格発表後に教育実習に向かう気持ちについて

	人数	%
教育実習に向かう気持ちは、試験の可否に関係無かった	10	56
教育実習に向かう気持ちは、試験の可否に少し左右された	6	33
教育実習に向かう気持ちは、試験の可否に大変左右された	2	11

(回答者18名)

4. まとめ

本稿では、過去5年間の食物栄養学科卒業生の卒業時における就職状況のデータと、在学中の教職課程2年次生への教職課程履修に関わる質問紙調査によって得られた情報をもとに、学生に内在する進路指導上の課題を発掘し、その解決策について考察してまとめた。

1) 過去5年間に食物栄養学科を卒業した学生のうち、教員免許を取得し教員となって就職した学生は4名0.9%で、極めて厳しい現実がある。それに対して栄養士・調理師として就職していく学生は教職課程だけ見ても約57%にのぼる。こうしたことから、教員免許取得を希望する学生には、本学における教職課程履修学生のこれまでの就職状況を理解させながら、教員採用試験への取り組みを促すとともに、栄養士免許を基軸とした進路選択の可能性の理解を図ることが大切である。

2) 平成28年度2年次生に対して行った質問紙による調査結果からは、以下のような課題と解決への見通しが見えてきた。

- ・四年制大学の学生に比べて教職課程を選択決定する時期の遅い学生が割合多いこと、自分の考えで主体的に教職課程を選択する学生が少ないことなどが課題としてあげられる。
- ・学校説明会や学校見学会を機に教職を目指すようになる学生が多く存在することがわかった。本学の入学試験ではどのような形でも必ず面接を行うので、教職課程を選択することがわかれば、教員免許取得を希望する学生に対する本学と連携した高等学校からの教職を意識した進路指導の可能性も考えることができる。
- ・教職課程における学修がコミュニケーション能力や表現力など、実践的な力の育成につながっている。こうした力を生かすことで、教職以外の進路選択の幅を広げる可能性が生まれると考える。また、教職以外の進路選択をしたのちに、再び教職に就くことを目指すことが可能となる

ような、長期的な視点での進路指導を行うことが必要である。

- ・教育実習前に教員採用試験の可否が発表になることによる教育実習に対するモチベーションへの影響が少なからずあることがわかった。今後そのことへの具体的な対応の在り方について考える必要がある。

5. 謝辞

本稿をまとめるにあたり、調査に協力してくださった学生諸君に心より感謝します。また、過去5年間の本学食物栄養学科卒業生のデータを、わかりやすく処理した形で提示してくださいました林原入試対策部長、そしてアンケート調査のデータ処理のお手伝いをいただきました本学助教清水陽子先生には心よりお礼を申し上げます。最後になりましたが、終始ご指導ご助言をいただきました澤辺桃子先生には衷心より感謝を申し上げます。

6. 引用文献

- 1) 文部科学省「公立学校教員採用選考試験の実施状況について」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/senkow/1366695.htm
- 2) 文部科学省「平成17年度～平成27年度栄養教諭の配置状況」
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/syokuiku/_icsFiles/a
- 3) 藤原正光, 仙崎 武：教職志望学生の進路形成 (1)：教育学部大学生の教職志望動機と教職観～日本進路指導学会研究紀要：bulletin of the Japanese Society for Study of Career Guidance (5), 1-5 1985-03-31
- 4) 三上 彩, 伏見葉月, 関 由起子：教員を目指す女子学生の進路選択に至る過程. 埼玉大学紀要 教育学部, 64 (2) : 177-188 (2015)